

# うまい商売

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫



あるお百ひやくしやう姓せいさんが、牝牛めうしを市場いちばへ追おつていつて、七ターレで売うつてきました。かえり道みちに、池いけのはたをとおらなければなりませんでした。まだ池いけまでこないうちに、もう遠とほくのほうから、カエルたちが「アク、アク、アク」と、なっているのがきこえてきました。

「まったく、うるさくがなりたてやあがる。」  
と、お百ひやくしやう姓せいさんはひとりごとをいいました。

「おらのもらった金かねは七ななだぞ。八やちじゃねえや。」

お百姓ひやくしやうさんは水みづぎわまできますと、カエルたちにむかつて、

「てめえたちや、なんてばかだ！ わからねえのかよ。七ターレ

ルだぞ。八じゃねえんだ。」

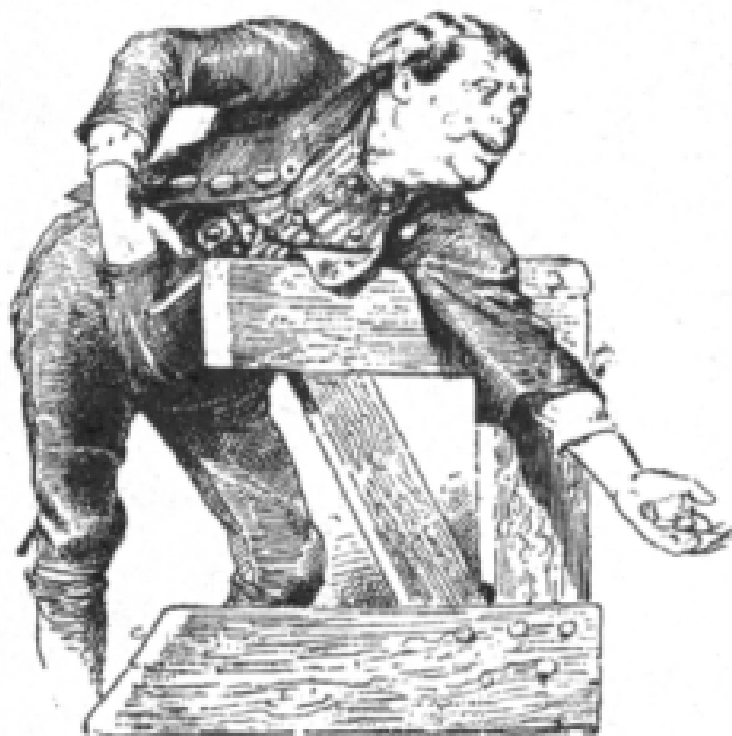
と、どなりました。

それでも、カエルたちは、やっぱり「アク、アク、アク」と、なきつづけています。

「ようし、ほんとにしねえんなら、てめえたちの目のまえで勘かんじ定ようしてみせてやらあな。」

こういって、お百ひやくしやう姓せいさんはポケットから金かねをとりだして、二十四グロッシエンずつで一ターレルと、合ごうけい計けい七ターレルをかぞえあげてみせました。

けれども、カエルたちは、そんな勘かんじ定ようにはおかまいなしに、またもや、「アク、アク、アク」と、なきたてました。



「ええい。」

と、お百姓さんはすつかり腹はらをたててどなりつけました。

「これでも気がすまねえんなら、てめえたちで勘定しろい。」

そして、カエルたちのいる水のなかへ、金をそっくりほうりこみました。お百姓さんはそのまま立っていました。カエルたちが勘定かんじょうをすまして、金をかえしてくれるまで、待つまっているつもりだったのです。ところが、カエルたちはがんこで、ひっきりなしに、「アク、アク、アク」と、なきたてるばかりです。そして、金などはなげかえしてもくれませんでした。

お百ひやく姓しやうさんはなおしばらく待つまていましたが、そのうちに日がくれてきましたので、うちへかえらなければならなくなりま



した。そこで、カエルたちを口ぎたなくののしつて、どなりま  
した。

「やい、やい、水んなかのバチャバチャ野郎やろうの、でか頭の、ぐり  
ぐり目玉め。てめえたちや、ばかでつかい口をしてやがって、耳  
もいたくなるほどギヤア、ギヤア大きわぎしやあがるくせして、  
七ターレルの勘かんじょう定じょうもできねえじゃねえか。てめえたちの勘定  
がすむまで、おらがここで待まつてるとでも思つてんのか。」

こういいすてて、お百ひやくしゅう姓せいさんは歩きはじめました。しかし、  
カエルたちは、あいかわらずそのうしろから、「アク、アク、ア  
ク」と、ないていました。で、お百姓ひやくしゅうさんはぶんぶん腹はらをたてて、  
うちへかえりました。



それからしばらくして、お百姓さんはまた牝牛めうしを一頭とう買かいました。お百姓さんはそいつを殺ころして、さて、どのくらいになるだろうかと、胸むねで計けい算さんをしてみました。肉にくをうまく売れば、牝牛めうし二頭ぶんぐらゐの金にはなるでしょうし、それにまだ皮かわものころと  
いうものです。そこで、お百姓さんは肉をかついで町へでかけま  
した。町の門のまえまできますと、犬がひとかたまりになつてか  
けてきました。みれば、大きな獵りようけん犬けんが先頭せんとうにたっています。  
そいつが肉のまわりをとびまわつて、くんくんかぎながら、「ワ  
ス、ワス、ワス、ワス」と、ほえたてました。

ところが、犬がいつまでたつてもなきやまないので、お百ひやくし  
姓しょうさんは犬にむかつていいました。

「よしよし、わかった、わかった。おめえ、この肉がちつとばかりほしいもんだから、『ワス、ワス（すこしの意味）』っていつてんだな。だがな、おめえにこいつをくれちまったら、おらのほうがかうまくいかねえでの。」

けれども、犬はやっぱり「ワス、ワス」とへんじをするばかりです。

「おめえ、ほんとに肉にくをみんなくつちまわねえか。そこらにいるおめえのなかまのことも、うけあえるか。」

「ワス、ワス。」

と、犬がいました。

「ようし、おめえがそんなにまでいうんなら、おめえにまかせん

べえ。おら、おめえをようく知ってる。おめえの奉公ほうこうさきも、ちやあんとわかつてる。だがな、いいか、三日たつたら、きつと金をもらうぞ。かね約束やくそくをまもらなかつたら、ただではおかねえぞ。とにかく、おめえがおれんとこへ金をもつてきさえすりやいいんだ。」

それから、お百ひやくしやう姓せいさんは肩かたから肉をおろして、また、いまきた道をひきかえました。犬どものほうは、たちまち肉をめがけておどりかかつて、「ワス、ワス」と、大声にほえたてました。お百姓さんはそれを遠くのほうできいて、ひとりごとをいいました。

「ほほう、あいつら、みんなちつとばかしほしがってやがる。だ

が、でつかいやつが、おらにうけあつてるだ。」

三日たちますと、お百姓さんは、今夜は金かねが手にへえるぞと、考えて、ほくほくしていました。ところが、だれも金をはらいにはやってきませんでした。

「もう、だれも信用しんようできねえ。」

と、お百ひやく姓しょうさんはいいました。

とうとう、がまんができなくなつて、お百姓さんは町の肉屋にくやへでかけていき、金かねをはらつてくれとねじこみました。肉屋はじょうだんだとばかり思っていました。お百姓さんはいいました。

「じょうだんごとじゃあねえ。おら、金をもらうだ。三日めえに、おめえさんとこのでつかい犬が、ぶち殺ころした牝牛めうしを、まるごとも

つてこなかつたかね。」

肉屋にくやはおこつて、そこにあつたほうきの柄えをつかむと、いきなりお百ひやく姓しょうさんをたたきだしてしまいました。

「だが、待まてよ。世よのなかにやあ、まだ道理どうりつてもものがあらあな。」

お百姓ひやくしやうさんはこういうと、王さまのお城しろへでかけていって、うったえごとをきいてください、と、ねがいでました。お百姓さんは、王さまのまえにつれだされました。王さまはお姫ひめさまといつしよにすわっていました。お百姓さんを見ますと、どんなめにあつたのかと、たずねました。

「ああ、犬とカエルがおらのものを取りました。それから、肉

屋のやつは、金のかわりにおらに棒ぼうをくらわしたでござえます。」

こういつて、お百ひやくしやう姓せいさんは、ことのしだいをくわしく話しました。それをきいたお姫ひめさまは、大きな声でわらいだしました。すると、王さまはお百姓ひやくしやうさんにいいました。

「いまここで、おまえのもうすことがただしとはきめられぬが、そのかわり、おまえにはわしのむすめをよめにやろう。むすめは生まれてからまだいちどもわらったことがない。それがいま、おまえをわらったのだ。わしは、むすめをわらわせたものに、むすめをやると約やくそく束そくしてあるのだ。おまえは、幸運こううんのお礼れいを神かみさまにもうすがよい。」

「いやあ、お姫ひめさまなんぞいりませんや。うちにや、たつたひと

りのかかあがいますが、あいつひとりでもおおすぎさまあ。うちへけえりや、あつちのすみにもこつちのすみにも、かかあが立つてるような気がしますだ。」

と、お百姓さんはこたえました。

すると、王さまはおこつて、

「おまえは礼儀れいぎを知らぬやつだ。」

と、いいました。

「でもなあ、王さま。」

と、お百姓さんはこたえました。

「牛からは、牛ぎゆう肉にくしかとることはできねえでござえますでな

。」

「待<sup>ま</sup>て。」

と、王さまがまたいいました。

「おまえには、べつのほうびをつかわすことにする。いまはさがつて、三日たつたら、もういちどまいれ。そのとき、五百つかわそう。」

お百<sup>ひやく</sup>姓<sup>しょう</sup>さんがお城<sup>しろ</sup>の門のまえまできますと、番<sup>ばん</sup>兵<sup>べい</sup>がいいました。

「おまえはお姫<sup>ひめ</sup>さまをわらわせたな。なにかそうとうのごほうびをいただきたいろう。」

「うん、そのとおりだ。」

と、お百姓さんはこたえました。



「五百くださるってえことだ。」

「おいおい、おれにもちつとわけてくんなよ。おまえ、そんなにたくさんの金かねをもつて、どうするんだ。」

「おめえのこつたから、二百やらあ。三日たつたら、王さまのところへ名のつてでて、それだけもらいな。」

と、お百ひやくしやう姓せいさんがいいました。

ひとりのユダヤ人がその近くにいて、この話をきいていました。ユダヤ人は、すぐにお百姓ひやくしやうさんのあとを追おつて行って、いいました。

「すばらしいことになりましたなあ。おまえさんは、なんてしあわせものなんだらう。わたしが両りやうがえ替かえて、小銭こぜににかえてあげ

ましよう。ターレルのような大きな金じや、しようがないでしよ  
うから。」

「ユダ公こうかい。」

と、お百姓さんはいいました。

「おめえにや、まだ三百のこつてら。いますぐ、小銭こぜにで三百くん  
な。あと三日たちや、王さまんとこで、それだけはらつてくださ  
らあ。」

ユダヤ人はちよつとしたもうけにほくほくして、質しつのわるいグ  
ロツシエン貨かでこの金きん額がくをもつてきました。グロツシエン貨な  
ら、三枚まいでも、質かのいい金かねの二枚ぶんの値ねうちしかないのです。

三日たつたところで、王さまのいいつけどおり、お百ひやく姓しょうさ

んは王さまのまえにでました。

「この男の上着うわぎをはぎとれ。」

と、王さまがいました。

「五百つかわすのだ。」

「あの、もうし。」

と、お百姓さんはいいました。

「その五百は、もうおらのもんでござりません。二百は番兵ばんべいにくれてやりました。あとの三百は、ユダヤ人が両りょう替がえしてくれました。法律ほうりつのうえからいや、おらのものは一文いちもんもねえでござります。」

そこへ、番兵とユダヤ人がやってきて、お百ひやく姓しょうさんからう

まくせしめたつもりの金かねを、いただきたい、ともうしでました。

そのため、ふたりはまちがいなくその数だけうたれました。番兵はじいつとがまんしていました。もうまえから、この味あじを知つて

いたからです。けれども、ユダヤ人はひいひい泣なきわめいて、

「ああ、いたつ。これが約やく束そくのターレル金貨きんかですかい。」  
と、いいました。

王さまは、お百ひやく姓しょうさんをわらわずにはいられませんでした。

そして、いままでの腹はらだたしさもすっかりきえてしまって、  
こういいました。

「おまえは、ほうびをもらわぬうちに、なくしてしまったから、  
わしがうめあわせをしてやろう。わしの宝たからぐらへはいつて、ほし

いだけ金かねをもつてくるがよい。」

お百ひやくしやう 姓せいさんはすぐさまとんでいって、大きなポケットへ、はいるだけぎゆうぎゆうにつめこみました。それから、茶店ちやみせへいって、金をすっかりかぞえてみました。

ユダヤ人は、お百姓さんのあとからそつとついていって、お百姓さんがひとりでぶつぶついつているのをききました。

「王さまのтонちきめ、やつぱりおらをだましやあがった。こんなに金をくれなきや、おらの金がいくらあるだか、ちゃんとわかるにあ。これじゃ、手あたりしだいにねじこんだやつが、いくらになるのか、見当けんとうもつきやあしねえ。」

「とんでもねえ。」

と、ユダヤ人はひとりごとをいいました。

「あの野郎やろう、王さまのことを、あんなにひどくいつてやがる。ちよいと走ってつて、おとどけしてこよう。そうすりや、このおれはごほうびがもらえるし、あいつは罰ばつをくらうだろう。」

王さまは、お百ひやく姓しょうさんのいったことをききますと、かんに腹はらをたてました。そして、ユダヤ人にむかつて、おまえいつて、そのふとどきものをひきつれてこい、といいつけました。

そこで、ユダヤ人はお百姓さんのところへかけつけました。

「おまえさん、ぐずぐずしないで、いますぐ王さまのところへいくんだよ。」

「どうすりやええか、おらのほうがよく知つてら。」

と、お百姓さんがこたえました。

「まず、おらにあたらしい着物きものをこせえさせてくんねえ。なあ、そうだろ、ポケツトにこんなにたくさんの金かねをもってる男がよ、古いおんぼろ服ふくのまんまでいかれもしねえじゃねえか。」

ユダヤ人は、お百ひやく姓しやうさんがほかの上着うわぎをきないうちは、とてもつれていくことができないとみてとりました。それに、王さまのいかりがしずまったら、じぶんはほうびももらえなくなりますし、お百姓ぼっさんは罰ばつをうけないでもすむかもしれません。そう思いますと、気が気でなくなりました。そこで、

「おまえさんは友だちだから、ちよつとのあいだけ、おれがきれいな上着をかしてやろう。人間てのは、なんでも愛あいの気持ちで

やるものさ。」

と、いいました。こういわれますと、お百ひやくしやう姓せいさんも承知しやうちしました。そこで、ユダヤ人の上着をきて、いつしよにでかけました。王さまは、ユダヤ人のつげ口したわる口のことをいいたてて、お百姓ひやくしやうさんをしかりつけました。

「あれまあ。」

と、お百ひやくしやう姓せいさんはいいました。

「ユダヤ人なんかのいうことはうそばかりでござえます。あいつらの口からは、ほんとのことはひとことだつてでたことはござえません。だいいち、ここにいる野郎やろうなども、おらがこいつの上う着わぎをきているなんていいたててますだ。」



「なんだと。」

と、ユダヤ人はさげびました。

「その上着がおれのじやない？ そいつは、おまえが王さまのまえにでられるように、つい、気やすい気持ちからかしてやったもんじやあないか。」

それをきいて、王さまは、

「ユダヤ人は、わしかこの百ひやくしやう姓か、どつちかひとりをだましたにちがいない。」

と、いつて、またまた、さつきのターレルきんか金貨を、さらにいくつかユダヤ人にくらわせました。

お百姓さんのほうは、いい上着をきて、ポケットにたんまりかね金

をいれて、うちへかえりました。そして、

「こんどは、うまくあてたもんだ。」

と、いいました。

# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

※表題は底本では、「うまい商売《しょうばい》」となっています。

※誤植を疑った箇所を、「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社、1989（平成元）年5月26刷の表記にそって、あらためました。

入力…sogo

校正：チエコ

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# うまい商売

## グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫  
著者 矢崎源九郎訳  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>